

俺は先生

「ふぁ～あ」

これで何度目のあくびだろうか。間近で聞こえた遠慮のないそれは、この静かな図書館の空間では最大のマナー違反だ。周囲の視線が大いに気になる。

「そろそろ帰るか」

俺は目の前の涙目になった男に声をかけ、開いていたテキストとノートを交互に挟んで閉じた。身を振って椅子にかけていた後ろのバッグにどさどさとそれを詰める。男はのろのろと机の上に広げてある俺と同じ冊子を片付け、またのろのろと隣の椅子に置いてある黒のバッグに入れた。その鈍間な手つきに、椅子から立ち上がって見ていた俺はついイライラしてしまう。

「できた？」

「おー、待ってー」

お前が、テスト範囲教えて。と俺に言ってくせに。

こうも本人にやる気がないなら教えても無駄というものだ。それも、いつもいつも。

「電気」

「あっ、はいはい」

備え付けのライトを消すように顎で促すと、細長いアルミのペンケースが最後に黒いバッグへと消えた。

オーケストラとか、クラシックの中の一つなのだろうか。俺にはそのどれもが曖昧なのだけど。疎い俺にはキヨの解説が一から十まで必要だった。

「俺の集大成」

キヨがこの時なぜそう表現したのか、今の俺になればよくわかる。だけどキヨの音に、悪く言うと、打ちのめされたその時の俺はしばらく放心する他なかった。

「なんで右から見ないといけないかわかる」

「え、……いや、わかんない、かな」

「そっか」

「音の、広がりのため……とか？」

当てずっぽうもいいとこだったのだろう。

後で調べてみろよ。って、お前絶対成り立ちとか調べねえもんなあ。

キヨが、俺を見ずに言った。俺にでさえ難しいだろうと簡単にわかる曲を演奏したのだ。疲れたのか、鍵盤に視線を落としたままだった。

俺の脳は、場違いにもその横顔さえも美しいと認識し

ていた。

「すご、かったよ。キヨ、ほんとに」

何か言わなければ。労いの言葉を、一番の褒め言葉を、言わなければ。

感動が尾を引いているそんな俺とは正反対に、キヨの顔は世界の正しい秒針とともに影を差して次第に暗くなっていった。真っ黒な瞳のキヨの眼光が俺をシュワッと射抜いて、口を開いた。

「俺さ」

キヨの低い声に、どうしてだか不安になる。望んだ感想ではなかったのだろうか。でも、言葉選びが間違っても仕方ないじゃないか。俺にこの感動を表す天才的な才能はないのだから。

つづく